後撰集 上

共二冊

字

9-9
太政官文庫
和書門
特別
三一八三一號
第九番函
架
二冊

第五十七函

共二

内閣文庫
番號 和 31831
冊數 2(1)
函號 特 9 9

9-9

国立公文書館
National Archives of Japan

秘閣圖書之章

日本政府圖書

後撰和歌集巻第一

春哥上

正月一日二條乃きさいの宮にてしろきおほうちきを
給はりて　　藤原敏行朝臣
ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおとろかれぬる

春立日よめる　　みつね
春立と聞つるからに春日山きえあへぬ雪乃花と見ゆらん

かねみの王
けふよりハ荻乃やけ原かきわけてわかなつみにとたれをさそはん

ある所にいまゝいりの女の侍けるか
月日ひさしく経てむ月のついたちころまへ
許されたりけれは
よミ人しらす
白雲の上しる今日そ春雨のふるにかひある身とはしりぬる

朱雀院乃子の日におはしましけるにさはる事侍て
えつかうまつらて延光の朝臣につかは
しける　　左大臣　小野宮
松もひき若菜もつます成ぬるをいつしか桜はやもさかなん

院乃ねの日に
春の野にくる人しなかりせはけふの子日もなにのかひなかりけり

子日にとこのりとろしちかに小松ゆくえよるせ
海のりのかとゝひとりをまは

よみ人しらす

恵のゝやのへの小松を義ゆく秋もかはらぬよ[illegible]
むしらす

家の立みすの野人のよみをもありけるこそ人もあひみと
子日しに海りける人のとをまそ流れける

よみ人しらす

東ふ野にはことなしやものみに流れて寺はみえつる
宇多院の子日せんとありけれは或人のみこは

さうふとも　行明のみこ

去の野人のたにゆくといふ心をよめるをこゝろをよめる
まつのまちの寿とて　池のものり
水の面にあやふくおるまつ風や池のおもなみたかくなりなん
寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらす

咲やまつたちそへて春あらんかたことのなる花さくなかり
立をすきりては春さくへとにほへ雨ふりけるかと
みやとりて仰ゆる人のひとなむむとかはらは
そこひつゝのこりて御りけるとやむこそ君かため

て侍りけるをり[illegible]はかなき[illegible]のもと
に[illegible]けるによめる　　三條
春[illegible]に[illegible]ける[illegible]
[illegible]こそ[illegible]
[illegible]木の枝[illegible]ける[illegible]をりてはへりけるによめる
[illegible]の女
かくかる[illegible]
女[illegible]文[illegible]侍りて[illegible]
[illegible]けると[illegible]
むかし[illegible]月の[illegible]けり

[illegible]けりしよめる　　読人不知
[illegible]ましに
[illegible]　　閑院左大臣　冬嗣
[illegible]梅花[illegible]我や[illegible]てん
[illegible]花の[illegible]
[illegible]　　中納言兼輔
宿ちかく[illegible]
延喜の御時[illegible]
[illegible]　　紀[illegible]
春[illegible]月の[illegible]花や[illegible]

松の此時に御しこゝろよきろひけるに給はりし
たはうしにはつけられ淡せさ給ふと仰られし
くてありける人々をとりて給へる十二首つらゆき
歌も
之孫
ゆこさまに散る花のいとゞ山の雪あたら
花とのみこそ流れけり
伊勢
色もなき世の花のうつろひ浪とさへ知りぬらむ
人よ忘るゝまて待ちけるにあたらしやまず散りしけれ
素性法し

まことに我身のうへのあらぬは人のならはなちりけり
躬しす
我せこか衣はるさめとに梅花それとも見えす雪消れは
まとひ見え人とは我宿の梅の花折り流してん
香をたつねてはもちらん梅花それとも見えけり
見つゝ世にちらすまらん梅花かり衣きとも悲やとさん
我宿の梅の花さく雪とふる月にも見え流ふかる
梅花それはみつのえにしてもこゝにはれなはの流れさん
そせい法し
梅花香は袖にとまりし我もあは流せ家にはなれん

ねとこ八はにまれかみこいりて
よみ人しらす
かすてらはあやなく梅花たをりてはにおほ人のたまへり
年を入てかゝけるを女のことしけりとそ給
ふせといひけるゝ文のそこともまかりけれは
人ふらここそ雨にありてそとまみすさむすのなかれん
読人しらす
梅花八浅さかるまもたに八はをれは今やとかめむ
まあちの宿八野辺山よまりきをらん梅花さかりといふなり
かへるもしの雪八ふりはたまちて我家のうちの鶯かな

花さしといはれぬ色の鶯の啼声をきゝ人をみすさきぬ
鶯の声はる梅の枝にもれて花の外とまて我にさはらる
むかしもたにさすてはまた鶯のなきてはる事をまつとおもひなん
忘かためし山田の○さゝにたちてつむとあさにも我いつもかくみす
あひそめて待たる人なん家の梅のまてりけるよ
梅の木作りけり二月の花さかりのん時なりけす
せうとこそんといひ給へるをことなく給へしは
朱雀院の鶯まみこ 読人
梅花しらはけりよつりあれん雨のゆしる人のあつまてもなね
中納言兼輔かの女のあはれん

まてよいつ梅枝の折の我か名枝は実もつけす

まつの日おとめの浅ぢもかりしらぬかな

よミ人不知

梅花ちるそら今はまちあはて行ぬらん常陽か

かうひきくを帰ける人の家の主へおくる柳は今

折て

三条

同家のうひ今よりそるまさ柳よ▢ものから鶯の声

松のりとよかきこれ▢てもいは人わりて

さうの人のこれかりり

涼ここりまみえけんの松の緑をそのこしもかは枝よられ

前の句まえたて

也むかしも我から左に隣挿し松のさしりあれから

紅梅すむ花ぞくれて　三条

色ましひと交はにて梅花香やそとかく句はさら夕

のまちあれ雨と和して来けん風に人奉まに

ひとのそらに雪のすかりかまち哉

作り山哉

あ梅雪かんとけうむ梅花ちるほそ天すかりてかさ

の禄より此のわらん雨の禄やの主人のとこへしていと

うへて待ちのそとここせくりのこらむさ哉

すまひける女のもとにまかりて成ぬれはいひてことを
のかれかりてはいとひてまかりて侍け
ふみは此中に
まつことに咲まさりける人むかしとしをへて文かよはす男
えしかそこゝろくるしうて侍らさりけれはなん

巻第一

後撰和哥集巻第二

春哥中

こしおりそのちゝ梅乃花の人ひらゝしたるをまつ
おりふしになりて　前栽の中にあるをなん
桜の時も今年としもかゝなく宿かりしかは花を見て
雑やのまゝに千のひかりこゝろを風より侍りて
　　　　　　　宮つかへしける人の許に
竹のうちらそこに所はいとしき嘗宮ましけいあさみ也す
やまとのかゝのこはに侍るとて
　　　　　　　僧正遍昭

をちかたの山のさくら花さへけふはちる人もなき
都にも山のおもかけしるくとまりけるかなしへもとの
なりみ
うせいかし
山さくらいつはいつともしら雲の尾上の桜かなし
桜よりなき桜をかりてそこにたちのはゝりした
見えけれ
よみ人しらず
桜ひとえに見しは我桜のあとかなしくもみえけむまつ雨すまじ
返し
伊勢
見る人のかさもなくてはちるさくら花よとふなふ人の花にしらひたえ
桜の花をちるらむ
よみ人しらず

哀世をすてしの山さくら花のとけてこそ見るちりもしとせんへ
さゝなみや行のみやこはさくらのもとのさけるとも見えて
さつのかみのこれもり
桜色にふかく見えても異所の花とらの花にちりもこそすれ
よみ人しらず
題しらず
桜花よそにてもすまきくれなゐのさとにちる花のかけのちる
貞観の御時中ゆのまさきのけ
返り
河原左大臣 融
しら桜花の下に我よりいさなひかへてからうらの人の
家ありとのみ思ふころ時雨さいの桜

のちに山に入侍らむとしける時

もとの右大臣

桜花めつらしき物ならはいか成風に流れことゝなしていはせむ

春の心を

伊勢

青柳のいとよりかくる春しもそ中の山の霞

むかしのちりし柳かもなしつゝ花のかつら

あしひきの山の桜を見る物とむかしもまちはすへき

ゆかり浅きて

よみ人しらず

ゆかりまからむ花をとはるらん霞吹とけ春の風

朱雀院のさくらちる御時延喜御製

あるまゝにもはやいまは人のこゝろにしとゝはれまし物を

つとむるしはなりぬりそ

大将のやよひものおもひに

藤原義子　三条右大臣娘

咲そむる我よみなれは桜花人の心はとよ思へと

ちらしもす

よみ人しらず

春くれはこの花桜夕月とおもひはてしと花綻ひぬる

立まつ霞のたなひく山にこそ見む桜さくらの花をちらさむ

桜花はるかのこまゆはゝのよりの雁もさく花は世に咲むせ

花の生のはいかゝ世にもと女にはつゝみける

みるまゝに人の心は散てそ行らむ花の色は人の見ぬまの物かは

まるのみは言のきことそれいとうけ美の女なまや
そらんといふ古寺のひと人と女よりおはしけり
きましは
とくしたるまは美いまるのさらる夜おかしくなれえつかれとは見ず
女まんりとこれにけりしもなる前栽のなかまさの紅葉　桜に一本たまり
まあ柳のいと浦すくこと打ゆかいらるすらよ言よ御
おほまむやさむ木の葉に何ほた作りけるまこと
のもおりしかうりとそおりよ流れけり御り
きましは美こしたりなかに
山里にうるも御つかは桜花の花さかりと志見まさりまし

たかみこえし
ありし我世のうりそう知まじかりて今はたゞ人をも人は
小弐になんありける　若葉の穂にいでたるの紅葉
時しもあれ花のさかりにつらければ思はぬ山に入りやしなまし
返し　小弐
秋なるに思ひいる山の色にのこともけりしもさはなりぬる見え
邪しす　こゑらのたかせ
まろか池の玉藻よあかふかなるの名のいとゞ遠恋せなる
寛平の御時もの冬すゝにこめて見せす
とつくさらくやとらとてしれまんのまとかわせとらま

[illegible]

山風の花の香かとふもとには春の霞そほたしなりける

題しらす　よみ人しらす

春雨のふるはなみたかさくら花ちるをおしまぬ人しなけれは

京極[illegible]やよひ[illegible]さくらを[illegible]侍ける

[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]春[illegible]

とやてさらし[illegible]

さくら[illegible]侍ける

我宿のさくらの花[illegible]

[illegible]家[illegible]

[illegible]の王

年ふれは[illegible]

[illegible]さくらの家[illegible]侍ける

入道[illegible]

我宿の花[illegible]

[illegible]

[illegible]侍ける

かへりまうて
ありぬへしいらくは絶ゆるあめのしたによもかかり（?）
なかれいつる　わかれよ

巻第二

後撰和歌集巻第三

春歌下

贈太政大臣あひまうしてのちあるかたへまかりて
と女のいひおこせてはべりける
何ゆゑかいかゝ（?）おもへる　大納言源清蔭妻（?）
常夏はけりすゝむしりて我身ひとつのあはすもひとつ
桜のもむかしにせりはするかりけむとてるの流
さくらにちりしける　よみ人しらす
きえしのかるゝにかるゝと桜のかつちりもかへらでさきとらのとかくひをかけり
かへし
年代ふるはかはさせとて桜花まつをしらすやふる

題しらす　　　　よみ人しらす

ちりぬ共ものこりなくみへてはなとまてしかこゝろを

あさたゝむかへりて心よりも色まさるみ桜のいろ

ちりかまはいろはなりける

伊勢

かへしに数ならぬもと見るよりは旅にも流はみえもこそあらん

女によみけりけれ　　　　よみ人しらす

春の日のうちにすへて心と人の心にあさきやこゝろん

題しらす

よきひとゝもみえすとて旅をとまつ我身をもおもはれなれはさに

紀[illegible]の中将

風さむく絶えもちりぬれはしものゝ心とうらむるこそ

是よる雨よふれと待けれ女にあかしよなかれし

待まはきよ庭よあかり菊のもとにたれさらなる

いひおこせけりしける　　　　よみ人しらす

我宿の菊のもろきのあはれこやとふ人やあるとまちける

題しらす

山たかみ露にてちりぬる紅葉をいや紅の人はいかならん

吹風のさそふ物とは知なからちりぬる花のしゐて恋しき

紀[illegible]

うらくてまさかりし世業と花の心や何いかくらん
はかなくもうつしけり女もあらかまん
とをり桜の花の折しるりけると折て
ちりまさるのをもよりて人へにとかりあれん
二条后　惟高親王女
我宿の梅の実はまもちらまほしきにも世の中の人も
ちるの花このかさゝやしくもあらて[illegible]
おもしひゆる人そ見えけれ
まの花すんぬりけれ
よみ人しらす

春の日に新王たちとに在原業平の中将のみえけれは
春すむ喜にまつれ花かつこそる[illegible]
かくの花ひて世はや往ひて君ものこころかくへく
延喜のむかしの時の藤とのことをのすに
めしいひもてきてをのしかさしけ行けるけれ
いそり
かりかりちの[illegible]
かさせともきてかくまぬ二のまゝにものたとへ[illegible]
部しらす
よみ人しらす
一年にいさかるにもあかれ二夜も絶ぬるとなりて
ものりもその君まれかりすちろてころまと向

うしなひたりしかはりてみ　　貫之

まつ里は咲とふく我やともはるになりけれは花ちりなは

またもみむ今年なりたるかはらぬにいかなりしたり

そうこかへりきしともみかりなれはなかれに

このはるはすこしなひたりにておくりなれは

ひれにけりける　よみ人しらす

春霞たちのもみえぬこそあはれなれの命さき

おとこのもとよりめしのもとこせて侍りけれは

春日野の若菜のみかはゆきにておくれてのまん

詠人しらす

常夏をあひ人を数まれるも我か袖よりてもいかにせまし

ひとゝしのなこの孫ゆらのはかなくはしすなに

まうこ侍けるに法皇のおしてかの院よさうかえ

ものはえかたへ侍りなれはあらるしかみ

またくのえらこに西してかのさらしにさし

ひとりとかなは

ともよりかたりて

ものしかは着きみなつ人のなれとしてかなはれ

月のおもしろかりける夜花を見て

源のさねあきら

あたら夜の月と花とをおなしくはあはれしれらん人に見せはや

わかたのゐてに父家より萩花の侍るたよ
なりしける　　ありさまをさむらひかせ
宮内卿もかの人のよめるゐてのたの井手の山吹のも
とけのみつうつ身雨ふりてのちかの家よまろ
多くの和歌雨ふりかきしきりにさくらまろ
もちりのはかりよ雨ふりて我のりとに待け
まはりへの人せんのにしける
よみ人しらす
しるしは雨ふる桜花とか木のまへに宮とありける
かへし
あいたくの和歌　權中納言

帆とは雨ふる桜花をちるかなとあり　前大納言
桜川といふところありとして
山吹
雨ふりのまへ人はられは桜川もの波にかゝるなりけり
家さへ山吹やまかきあるところなりて
加藤ともけの和歌
ことさら一年に山吹の八重の花をおもしろくさかりけり
在原のなりひら
一年に二度さかぬ花なれはもへもこそ人はいひけり
寛平のおほきおとゝの時さくらのもとにてえんあり

きのふ雨のふりけれは
有忠のこし山花の都へ
春雨のむかしのねよりみたれにし紅にやなきかやこしきと
ちりとのふる伊りきつゝにつゝ流るそ
かくし人しらす
春雨ふるまゝなる給のえ花をも帰り行と見え渡れ
女とて花見しもとその人よりて
曲侍りけるかの和歌
春雨はむかしのことそ花もちりてかくの花と立のこれ
あひ春よりさかる人の色さしうこいさりけれは

此さくらみれはつしきこよと人しらす
我とこそふみうらうちまきも流もてき立るねる
ひとし
立よる春の霞そこのまれかもの花と見ゆるなる人
源宰相大納言けの和歌
山さくらはかりてとくり作りて
伊勢
見よと君てかもとる山桜をまとはれさりけん
三やれの下しける女の石ととふ示よすゝて京
またちのつり流のつしきる
大むとしらす

かくさむくふりし雪は侘人は都も白きものとてなりにけり
かくしはるの人の心あはれなる人をさそひて尋ねゆくし
なと云さしく行てのちもひきつて行りもの
人のりくより流れくるやはらかにけふ花は咲よ
ふりやといひて行りられん
これよりは吉野の山の桜もさてまさに見て帰りて
亭子院の歌合のうた　宇多天皇也　寛平とて延喜の比道世乃院号なり
山桜咲ける時は佐保姫も守の吉野の雪とみえける
山桜ほのみえて　つらゆき
白雲とみえてたなびく桜花ちるとやまたこゝろなる

鈴鹿山　よみ人しらす
也そらのまくらを誰ときおもひ吉野川の見にしかて岸の山吹
我宿のかとゝもたのむ山吹の花盛なくと咲ぬらむ浪の
人よんで見るのとりかへりたれか山吹のちり
そうしあるはなはまたさまそみえしてしはりしならむ
思ひ孫のそのあはれの山とさすらひ子山吹の色
咲きにけり乃色さかりにさく今ははりみちぬ　遍昭僧正
折りつる花を袖にさらふ間の雪てみえたる三世の仏も花
思ひしらす　よみ人しらす

又まうて来る時に嫗杖に付てまいりてはべり藤の花を
治世の頃のことゝはいはれ三条右大臣か孫
藤原家の御代の家より侍りて候ふに藤の
花さけるやり水のほとりにかきこれおく
この次第しへまうて依りて

三条右大臣 亀山侍

かさねて花かさす藤のむらさきのゆかりあるふるきを
藤か孫とけの行にん
色めくしきゆかりは藤立まつ源
依つ中ま人

さかさせと皆申ますに関白殿次第は人とまうしとまうす
こゝろえてしかれともかゝることゝは御
せうも程ゝ秋うたに名ある通ほりて

三条右大臣

こゝもよく見しものをそけさこそ秋猶てこそさらに咲てさりぬれ
藤をけの御代
万代のためしとしかてゝ藤のむらさきとけて乃千代の人をんや
朝かも下ゆく水はわきかれとふくむものゝ名は見ん人のある
部す
ことに人す
昔のいせのあらと申す藤柳の実

桜ちるものちらはさてこう称
とのもりにちりそへける桜も西新のなをとゝめて
あめのしたのちるこそもとめてこゝろあるこゝろそ
源の[illegible]あそん
ちることはゝらをしまれてあかれぬ人のおしまる[illegible]
桜のちるを見て　　よみ人しらす
桜色にふかく衣のふかくそめてきん花のちりなんのちのかたみに
やよひのつこもり月あかゝりしよのいとめてたかりけれは
まよしみみうへて左大臣の家に侍りけれは
[illegible]

あまりさへ[illegible]て[illegible]年たにまてわすれすかりしもの
かへし　　左大臣
[illegible]称よりものとけかりける年まてちらさゝりける人のありさまを
つねよりもまさりて花かひとゝころにさくこと侍
ていつしかとまちけるほとにすくしてこゝろの
みなりかゝりやよひの[illegible]にてふりにけれは
藤原のまさたゝ
たゝすてゝ年にしられぬまつはなかりてはるはるる
こゝろにてかたみにゆきとまりのまよひてかはりまさる
かへし
[illegible]

京の都にて花も森の花か散りけるを見すする故は
八重山吹の色にも花は入りて見てもすす
たゝしす　ふこと記としす
かゝとしまゐらせ候のなかの名には入すつにまゐる
ミう孫
いさ花を見るしま御寿すかなさにはにぬめめ木子
やよひの花にとり　はつ山
ゆくは花はつかりやとも花とめのをしとしまゐらせ候はふすれ
ふ人しす
せわいる花ま乃かしかんなとまゐらせ候はゝ御

ミう孫
夢てまた寿すとたゝるまえ書と花の花も花へるさん
やよひの花にとりの日記さえまして上
よしいひて袖ある名のおくよの袂なれて
ふひ色りきゐ　はつ山
たとえは時うと花の人たゝのまれかね袖を一しあまてはかこと書に
はつゆきかて書し年はよる身はりよ
ちう

巻第三

後撰和歌集巻第四

夏哥

題しらす　よみ人しらす

けふよりは夏の衣に成ぬれときる人さへはかはらさりけり

うの花の咲る垣ねの月清みいねすきけとや鳴時鳥

卯月はかりまうてたちのをとこ鳴せること人ち

し侍るをすせしうこれけりしてんとまち

はへりけるにまうてきけれは

時鳥まつかきかつかつ鳴夜のかすをかそへこそぬ

かへし

都を遠ざかりては老の思ひよそへてこそみゆるなれ
ともいえり住なれし人の里にて住なれたる
ちか家のつゝ孫乃うちのものがたりて思ひ出て
侍る
ころの昔の塩竈の御花見しと見侍るを都のうち
かへし
人まちし心きりし御のものかたりける塩竈を思ひやり
うのものつゝ孫ある家にて
時しもあれ雲る霞と見えける塩竈を今はさだめて
見しむかしのことにひきそへてたのもしきうち

佐めみすとて
見あまたみつゝ孫の御ものかたりとこそ見え人のまうけ
所しもす
時しみす月の雲かゝり見るまゝに塩竈のあたりにさしはる月の
鳴きえやしつめん雲かゝみす塩竈のものの哀いとまあれ
御月はりの月かけしつかりける殿人よ佐り
りしもとる
あひ見しとまた逢て時もる月にかくこれよりくまもなき
女のうへに伝へりしかる　菜まけ
かりそめに遠の山の時なるとしゝるさとにてかすみすむあはれなる

題しらす　　　伊勢

こゝろまて有明の月も時雨と霧の松に成りせは

藤原の惟房の命婦かもとに伊勢かつかはしける人

のてよみける文のはしにかきつけゝる

よ(?)にもみえしに成りにしを

うき霧の秋の和泉　　中将

おもへとも昔の宿のこひしきにかへるかたなき

かもの河原のとの見ける女の車にかひ

いまそ行あらし人　　題しらす

時かはる八十氏人の身にてつけてしたのむかしのこひしき

いひはへりけるかへしにまかりてさ(?)は人のあふさか(?)てみ(?)は小(?)をせし

題しらす

この比の有明の月をさやかに見むと思ふは我身なりけり

紀貫之はきしたりけるのよ(?)ひ(?)みて

あはれちかくしてぬちりける所のこゝろ

朱雀院の東宮にまかりし時

いまもかはらぬ有明の月

かきたえてこれをまた言ひける

有明の宿のこゝろなるを時雨のやとりせん

夜の秋物のあはれの声をきかて

菅原の孫とけの御哥
姫松の宮やまとにたつさこの宮の松を吹かは嵐さく
松すむなやと　浪の花の歌
足引の山下水はめりよしことの葉には人ありける
部しす　菅原の大臣孫の御歌　菅原大臣御孫
夜の梅は香は花のにほいて青葉の人のちるらふ香はしやさん
萩よりとけの宮は夜の霧は暁の花のまつはちりけり
　みなのたつ孫
あれ志りて何もなるなるのかをもてこれと心さし
いかりみつはしむいいとけりてえひいはさうさまれん

花家のこしよりと夜の梅の香にてあ萩の花はかりさる
　よこ人します
夜の梅志りし物さりして世はりふとする人のりとに
又の節に流りりしけむ　山世
二季にとくとはすしに対る梅はつく日てこ葡しいる
人のりとに流れりしさる　菅原の庵をと公年
あみとりて萩よみろの夜の日の弟子のもてなけきいる
　よこ人します
うは海つつ人のつくいかとくさみあはあ前よいさくはとなきまし
心ふくしと何もるるへかとしさくはさして

わりくへて禄とのゝ花まて時鳥きけは雲ゐの松にかゝる
卯月五月くらきに人雨ふりけん
とよら給たもしこよひを聞て
時鳥こゑは梅にや鳴らん我は聞つゝしまん宮城
題しらす
むかしの物思ふ我と郭公きこえしとゝめよかし
おもしろけれは旅の時鳥たゝ二声三声鳴てこそしつまれ
五月よりのたゝし小女り
粘なぬ我源山るの時鳥声かきも風のふくたにさこゆや
たいしらす

こゝ夜にゝなきそを待つん時鳥をとめ源山よ宮みかゝれん
宮もかはりけり滝の時鳥聞とて我ならひなる声ぞ聞え
三条太政大臣のもとにて侍りし人待鳥の心に
かなしき不如帰我かたの人のこともまた人くるまた
五月の雨そこしや其月かたくらまし
さくらにさけたゝし思ひて月の夜をまちて侍るを
流るとお時ハ加ゆことも郷さりけるは三
やましひてあかしはなつとたのまぬ待ち風
ゆうしの女
有明は豚なる月を我さもになりつ惜つゝ侍

さらばことゝて御座あらん人の菴に参り候て候へかし
せうろ
かさね 人申す
二郎より我等か見て其のさうもちを人を尋ねする
参ります
足河の水鏡にうつりて見ゆる面影は孫にてさふらふ
有明の月の影に向ひて嘆き給ふ女の
こゝに西よりたゝせられし女
ほどゝきすこそ時鳥とも聞ゆれ孫か頼む
申します
又このむかしより時鳥我か面影を見る物の聞

梅孫て書きひきし時鳥の山路にさそはれて
衣の袖はしほるゝ人の我に心をかへて参りし
女の姿に向ひてたゝずみしに年の
うつりゆくに此のもとを忍ひてのちに
つらしものか　花
時鳥こゝにて孫と聞きてあはれとは思はれて
有二つ月まつに我と仰て
かさね 人申す
有明の月の光を見るも物思ふ我身のうさ
女よいとしの月ての月見て参ります

時鳥一声にあくる夜の驚きもあへずこそうちしきり
勝とす
うらみても猶なかるゝすべて時鳥むねのはこすまゐすかな
待ちとる此夜の寝覚の声なかむ人の見なし鶯の声きこゆ
いましる秋萩宿は夜毎の声をきかばやきかぬ人の我ぞしる
宿の声こそかくよやうかへりて我世にすまゐ
人のわくに流れりける とある時さのはひ
いはん小倉の山の時鳥おれわたりにし声の音なく
持とす
ようえ勝とす
時鳥鳴きこの一声にも経世のうれはしくすまゐけり

我宿の花橘よ人しるこそ世にほかなる人にはみえむ
今まで我世なりけりとここ夜は世にみむ時雨の来にける
ここ夜の世とも見えんことのはなる月日ともしかかりなん
ここあはれなるそいふ今まで我のかきは冬なり見てまた
かくし
きいふ冬も来すばかなる風もやまとまさとこちらをすやい
とる時さの秋夜のまとりいけ待ちるここ夜
のちとかりてもつて待ちもまたこの世につきぬれ
ましものつとのかなしとる待ちけり
太政大臣 貞信公

櫻には心もとまらてさまもうへはなにをうらみわかる
たいしらす　　　　　　　よみ人しらす
見しことのむかしのことく秋まつは秋のむかしのくまなかりし
よをしのふころもかたしき夜の月になれゆくすまの秋かたきよく
夜のまの月はかりそ住わひて明かたの空をかへるこゝろの世にはる
かさしの我年のみ花にこそ鳴かけし夜のまゝら月かかりて
秋ちかき夜にて出けん時鳥いつくのかたに鳴てこれより
かたらのみこのわかれをいつまてと思ひ乱れぬ
わかいのかさとのうてしきれえて
ほかとも かたまれは夜もの身よりいくさわかれ

題しらす
天河水漏らし夜のゝそ月のよしもかな
月にはみとかりて流れわかさまて
ふめしきてみかんれくめ
法印幽斎
むかしの時鳥さへいつまてあはれはすくなかりぬ
かへし　　　　存意の為さた
むかしの色をもゝてはかなき身はいろとのかり
たいしらす　　　　よみ人しらす
夜明のうき身をかくしてはわかれはもやと思ふ人の身

夜のこと月おもしろく侍りけるに
ときうこのかせん家に月の影をや秋ちかくなりぬらん
水背月さへ下にもぬらす西はそ月のあり
売とよみそ
かはしもに庭すゝしくて照月を以て見るや夜をへつゝ
こよひ月みる人ありとやしらし
あまの川かはせの波のかゝりけん秋をまつよそ
夏哥下

後撰和哥集巻第五
秋哥上
これさたのみこの家のうた合に
よみ人しらず
にはかにも風の涼しくなりぬるか秋立日とはむへもいひけり
読しらす
うちつけにものそかなしき木葉ちる秋の始をけふそと思へは
物思侍ける所に秋立日人のもとにつかはしける
なかなかに宿は隠しも秋立は身のなけきそへそまさるへき
よみ人と読あるまゝ

いとゝ物思ふ宿の荻の葉に秋とつけつる風のわひしさ

よみ人しらす

秋風のうち吹ことに高砂の尾上の鹿のなかぬ日そなき

おほ江のちさと

露しけみ草まねく花と見し秋風の何に吹らん

女郎花よりの月なかりにいろとこそせたれ

よみ人しらす

秋萩を色とる風の吹ぬれは人の心もうたかはれけり

かへし

在原の業平のあそん

秋萩を色とる風は吹ぬとも心はかれし草葉ならねは

源のおほきみのむすめにしのひてかよひはへりける時に

あむ侍るのをかしこくはへりけるおやのきゝて

まうりにさまうくてりてとむ侍りして

侍りけれは

閑院

あふ事はたなはたつめにひとしくてたちぬふわさはあえすそありける

題しらす　読人不知

天河わたらむ空もおもほえすたえぬわかれと思ふものから

あさちふのよにふるまてもこえぬとそ

なき人の雨ふりしよりはかまてもぬれて

源のすくるたゝ

雨ふりて水増りけれは天川こよひはよそにこひんとやみん

かへし　　　おきなしけす

水増りあさせしらすもなりぬともはしわたすへきなみにやは

七日女のけふに流れゆきしを　　　　菅原の輔道

七夕の今夜はけふ天の川こよひはよるは渡せるかし

かさゝきのわたせる橋のたえまより見ゆるかとこそ七日の夜にしてまたれし女

のうちそ待ちける

むこ思ふ涌出あまの川こよひはあひみんとおもひけるかな

七夕のあふよしもかくてこそありとしひあはんとい

いとゝ夜て待たれん

恋しくてあはんとおもふ夕暮に七夕つめもかくこそあるらし

かへし

あひみねは恋しきものを七夕つめ人やいかにと思ふ

紀しけす

天川わかれし恋しくなれはこと　衣かはしもあまの川

まつらんとおもはれぬ玉のをの涙にたえぬこそあれ

織女の待ちしよるのあふせ　七夕のあひぬる夜はすへてあかつきの

ゆくりなくてのみなかへてくる年のほしあひはあらねと

七夕のこの夜にあふ人もなかりしかは

在原元方の歌
あふよのとしこそは七夕なからやふん逢ふ風りて
よみ人しらす
七日
七夕のいまなのとまちし夜は逢へてかたるの清とまるらん
七夕におもふ
天川と紅葉をはしにわたせれは 忘ること亦ていこそしもえもれ
て河にこそす波の立るて 秋の吉ま守てこそまつ
このそのり
しるよりは天川原にあまる人すこし名こらすなかるらん
よみ人しらす

天川すれて渡るなかしのあさきせし 秋の志くや紅
又河せのたちのこ波たなれと たなはた来あまつ川よる事しこと
天川渡る貴船と紅葉ちらめ 気多ん渡る中にあ多重ねて
秋寒はつはしまちより天川 なこ人のたゝみる日ちらなつ舟
七夕乃年とにいへし天川 雲たちまちりいさこる袖なし
とみ
秋風のかくしれはを七夕は無て吹かれ終す雲のすれ
七月八日のあした 又秋乃けるあらん
七夕乃舟乃天川に秋とかくしみつまかりきたらん
なすして
つゆまひ

羽ニ成とそのまゝ光やまさるらん云ふ河のあたりのうたゝねしつゝ
いふこと作りて　よみ人しらず
秋風の露はなすゝきにひとりさは世のことりとなりゆく
郎しらず
松虫の声のさかふ野辺は暮山よりや吹おろす流り
業平朝臣
山嵐雲の上まてはぬへくは秋風吹をかりはつもらせ
よみ人しらず
野風の草葉なくさそ吹かへるなのにほひの日暮にそ
紀ゆきえ

日暮の声きく山のちかければつれなきよりは日さすらん
よみ人しらず
初しの声きくかたに松虫の人をまつとやなきわたるらん
いあつて寺のを志るの苗の日暮の声まてそのあさなく花
秋風の吹あるよひはきりしをそ草の露もやそれなくなり
袖さへとまるやるゝ露きりし草むやとりはするすゝき
おもひあひし初や盛あり松の声にはつ松虫の声はすき
稲の葉床やとる人も忘れす非はつ人にはつ花にさくらん
秋かせの吹しきはかせやはしき流虫声に松虫の鳴
藤原のりとし朝臣

秋風は物思ふ人のみならすあはれをしるやなきのこゑらん

よみ人しらす

風さむみ鳴山の浪に笛ふきてとふらむくらか

嵐の吹しく松は山高み浪立つるとそ聞ゆる

きこえさためのみせの家のうへにうつる

よみのたゝ孫

松のこゑは風のしらへをまかせてはたつた姫こそ秋はひくらし

あまたにはみちもゆきのまよひつゝ家に住なる

にしきのくらにふみしたしてけりけるかな

忠房　小野美材

山里の物さひしさは荻の葉のなひくことにそ秋をしるらん

そのことそしるらん

よみ人しらす

かくはかりをしむにたえまし紅葉の秋にはあえてやともそすみ

ゆふくれのかことにりのひかる女の声よりに

流れてもみえぬ紅葉は流れけりしとも

よみ人しらす

あまの河流れてなかき夜のまにせつたなとる紅葉の色をそかめつ

かへし

山とそかなる山里の紅葉しかるかへ花すらも猶かれなし

よみ人しらす

藤原おきかせ

草のいとにぬく白玉と見えつるハ穐のむすへる露にそありける

巻第五

後撰和謌集巻第六

秋哥中

延喜の御時よ秋の哥めしけれハたてまつれる　醍醐天皇の事

つらゆき

秋萩乃をる時ハいとゝ恋しかりけれハすゝむ人見えけれは
世の人をかくしかハらぬ秋の野にさかりの見えける

寛平のおほん時のきさいの宮の哥合に

読人不知

滝ちかく立まさりけりかたの…見えてとまる
秋すゝむ時のとゝまるへし

なるかよ我宿はたちよるへきところ見えし
若宮の歌合に
いさかすくらに見えぬ
ものこと人 寺
秋の野はさなからとまれ人の来ぬまに
ところ見えしものかなしきそれ秋のゆふくれ
たのむそれさらに我かとに見えしものゆゑ
なりける花の人すみけるに
近江更衣 源周子
太皇太后宮
有明のわかれしより神はいはし宮なる秋のさかし
近江の御製 一本
かくてまた秋のなきけり時すきて宮はらはしにうか
亭子院の御前の花のもとにおりてやかさうへすかん
よなりしてみやこさみのひて
亭子院御製 一本 貞観之
白露のおくかたもしらすわかれてのちはものとも
かなしきへし
伊勢
えもいはれぬ風のおとを見えしや宮のよろこ
大輔か皇后宮によせむる宮にまゐり
ところへしとかりてわかれしせんな
右大臣 九条

おりてこそ神さへあまてさこそあへしるもまた地にいつもしらん
かへし　　大輔
ちゝはくにかゝる為成ともみえしかといそきそ愛あさらん
又　　太夫に
きみかゝす露のよみし縫ほころひぬるしもおいさらむ
かへし　　大輔
まはやうらみ世は露色心ともまて世なやへたるらる
おもひありて作りける女のかきみさりて作せし
もとしくらいさりける八月ころみまりし
しらすといと佛の前と花とこせそ作

まは　　　よみ人しらす
白露の入はほとつく菊の下葉も紅葉とそ見えし
成て　　　　そせ
なか月の菊の花におりすて秋の色はさきにゝりけん
かとこのりまに佛はつりしきか
よみ人しらす
人はいさことゝもしらす源もれ秋の家か見秋て志る河
人のけさに尾花のいとたちさと佛はつりけしみる枝
かへりこに思ひあふくみて
兼中文宣旨

も露かにかゝりてことゝはに宿は昔の今の萩ぞ見ゆる
かな　　　　　　　　　　　　　　左
宿りせし人の今はに秋は我が見るまゝ猶ぞ恋しき
読しらす　　　　　　　　　よみ人しらす
秋萩の花咲にけりよの鹿なくなる鹿の今ぞ鳴くなる
花に白露置きし折もぞ見るかな
　　　　　　　　右大臣
露の我身とせしへと秋の夜はかくこそしら起ゐあかしつれ
秋の野をゆきしある下女ともあまたねすなり
に侍るよみとこそのりしとて八重花侍
もとは人ぞ酒ならずける
　　　　　　　　　よみ人しらす
白露のおく女あまた住秋をもの色くずりと見ゆるかな
八月の十日ばかりに雨のうちふりける日よみて
つかはしける萩の花のいたく散るを見て
しそとうくかへりもとはれりしもゝ
　　　　　　　　左大臣
萩ぞ月をかへしてとゝへし雨やそをはなかはさるらん
読しらす
　　　　　　　よみ人しらす
秋の風ゆふの宿の萩すえさえる秋ぞ今はしとおもふ

穂のはにまねくすゝきのあはれ人はなれたるのましきは
たえまのなきとなりて人にはなれすて
垣根しけみ人もこぬ宿のあきかせにさやまる秋萩
秋のくれとてふかき
ちかりてかなしき物なし　麻衣すかたの秋
流〻山家
我宿の庭の秋萩ちりぬれはあかみん人や命とこひん
乙孫山家の歌
よみ人しらす
白露のをきまよふかに秋萩をなれてみれは我やわかれさん
こしれぬにあるこし我心こそなましけれ

いそち
秋風の糸稲葉をこゆるあはれのなくてあはれにしかもなく
流〻山家
都しす
穂田のかりほの庵の苫をあらみ我衣手は露にぬれつゝ
天智天皇御製
よみ人しらす
我袖に露そをくなる天川雲のしからみ波やこすらん
秋風の枝をしほる月によはりし白露をみるにをけはかなり
我宿の尾花か末の白露をおかすてたまのぬくをみる
延喜の御時哥たまはれし
流〻山家
さをしかの立ならす小野の秋萩にをける白露我もけぬへし

穐の歌とて 草ハいとゝ色かへすにハ並白露を玉とぬくらん

文屋のあさやす

白露ハ風の吹しく穐の野ハぬきとめぬ玉そちりける

きよ見称

秋の野ハに並白露をけしきに玉やなるらんかとなれハ

知しらす

よミ人不知

並の千葉の色なる物とおもふをのミ人のいふらん

白露ハ秋の木葉をそめるとや見まかふ露のきえぬらん

秋の野に並白露のきえぬれハ玉になりてもかけて見えまし

かり衣袖にうつる並露ハ我身と秋の野をやなるらん

おほかたハ我か袖ぬれしとあきかたくみかすしく露やおきてとふらん

あさことにハ並露袖にかけたるに世のうき時のなみたなりけり

穐のうたとて 貫之

秋の野の草もわけぬを我袖の物おもふなへに露けかるらん

忠岑

来ても見ん人もなき宿の秋なれハ今夜の月の秋をまつらん

よミ人しらす

秋の夜の月の影こそ木のまよりおちハ衣と身をくたきけれ

袖よりも清き月の光ハ秋ことにこよひの影とみえてたく

秋の夜の月にかさなる雲はれて光さやかに見るよしもかな

稲の浪月のうへにやあまるらん枝の枝よさやさかん　そのゝよし由り
如雪
秋の海うら風まる月と立かへり波は詩人と吟もかな　寸
おもしろきたの見んこの家の今宵かな　ふく人　寸
秋の夜の月の光りは清れと人さへ心の底はてらさす
稲の月見よかしてる影そゝやこゝろ有かほに見えたまし

八月十六夜
前後のまさたて
いさよひの月は秋なるまたおもてこよひの名や下さん

月影はかゝやく光の秋のよは見る雲も霧りけり　ふく人　寸
月を見て　ほかよしみの詩やん
思ひ出は秋やくらん今宵の月なれのゝ名こそあれ
友之
ぬれし心も詩を月のよき夜秋の雲とこれこれ　ふく人　寸
かの尋かけてこそ詩をするよく月やまと心と
秋風に猶や立つかなる月の影なる
稲の穂に今宵ふられしをまつてちり済さむ

ここかへり和泉ト秋乃衣　そなたの川のかはらかれ　ぬる屋ま
ことゝ人なす
吹風ぬふ見えぬものゝむすしくは秋の心をうごかしけれん
稲乃穂も人をこひめて連しくも嘆きする事に思ふれは肩
出そらめる
菅原のさらに
ぬ霜ともなき秋しなかれ住吉の子弟にとる玉ぞとふ会す
八月十五夜
秋の夜はいく夜の月新涼めぐらなかしう天の河霧
延喜の御時秋歌めしければたてまつる

伊勢
たなばたしまつる秋の武蔵野につゆふかきをむすぶまつにも
人よ浜つりける
兼覧王
秋きらば花さてにほふまで女郎花立てる人や何ぞたけのゝ
亀いしなす　ことゝ人なす
女郎花茅村にむまし河雅經住乃者はたゝ今て
女郎花もみるそましと秋の夜の月乃光の雲かくれて
たなばた花のさらに秋夜の風女郎花なかなかん
貫之
白露乃衣としかた女郎花さける野べこそ神ぞ稲きる

名にしおへはしひてたのまん女郎花人の心の秋はうくとも
　　ミつね
すゝしける花の名をとこへし秋かりかね時をとりし
ところ人しくはるかなる松にとかやと人しは
穐の野ハるゝ色を弥ん女郎花をみなの色にをみなへしつ
せさいの女郎花結ひうとこうめて
女郎花をみなさうてふる時の秋をゝくみ年かりける
ときよのかたみをしのゝ花つうとる女郎花と
ねかりてあつらしの見ゆこのかみしよすとて
　　三條太政大臣

女郎花もの名にかけ給ふ心ハ元の娘をしきも世に
うし比家をんむしみなハせをうこかうし給ける
を女のためなる用なるともしかて思ひきねあひにみ
つん伊勢なる
清女ハ世の家の女郎花とうしかれ他之もまくらへ
をとこうて
女郎花をりけん袖のうつりことも色こし元代をよひめやと
　　　枇杷左大臣
しへし
女郎花咲ちるすとまへとさかへ命をかけすなに
　　伊勢物
小集第六

後撰和歌集巻第七

秋歌下

題しらす　　　　　　よみ人しらす

かくはかりもみつる色のこけれはや[illegible]

秋の夜にあひし[illegible]花薄[illegible]かゝる

寛平御時きさいの宮の歌合に　　在原のむねやな

花薄そよともすれは秋風の吹かとそきくひとりぬるよは

題しらす　　　読人不知

花薄ほにいてゝ[illegible]

秋の[illegible]関守

もの思ふ人侍る時　貫之
秋の夜にかりかもなきてわたるなる我思ふ人のことつてやせし
読人しらす
秋の夜は露ひえてかりかねの我衣手に置霜そまつ

よみ人不知

□ゆを月日のゆくこと寄りつる居てそ待て秋に菅里
やまとには雨のふるらし
かりかねの鳴けるなへに高円山は紅葉しにけり
読人しらす
秋風にさそはれわたる雁かねは物思ふ人の宿をよかなん
聞けと鳴雁かねは我宿の尾花か末を過かてにして

いかなるとかして藤まよひ秋にはかりけるを
妹に恋ひてさよ更て雁かねのきこゆるそらにかりとのみ
思ふまよ我心はいつこの里にかりとのみ鳴わたるらん
人のかりいまそかりけるとやは聞て
忠孫
年ことに雲路まとはぬ雁かねは心つからや秋をしるらん
やまとには雨ふりける時のまとはれつゝ
よみ人しらす
天河かりそとわたる佐保山の梢はむへも色付にけり
魚捕の舟とも侍よ行まとふ時むさ

なかなかもしましくは雨の足日はよそにたまる
こころありてかかりよなれしれいさの神まて
むかしは雨りて和歌より後まてかくしてはしをと
なり給ゆる
菅原のたかさの卿
秋萩の立花の錦に時は代のかへて君の恵き
為いしす
在原のかさりた
雁とな鳴なの草も秋いか秋ことにいろを添へまされ
とと人しす
秋の野に錦のことく見ゆるは冬の露をも床はなかりしとよ
稲の野よいかなる衣の色はへ千乃東花色つらうん

住川もやはらぎてきの人秋の野をといふろへんとて色かはる事
秋の空もなり
竹の葉ちら嵐の寒露にま寄もるとてにはかに物をと
とと人とす
誰まけもみかる露よきれの木末もしらぬ色とうるん
うちくへて松けれ松の世出の松色とる秋の風よいるな
稲時雨とはれ山の木の葉の錦とよもつもみつとらへん
いもひとこくともおほとて竜田山しとそまた〳〵色も露もかな
露すきもむきそ神の衣すし竜田の山衣をそこす秋ハ
見ることには秋山もまうき竜田姫をとゆらさしゐやまの衣をかへん

深山も狭衣の物語

あつさ弓いるさの山ハ好忠さらのあつさゝやまと申也

入ての雁かねハいるさといふ事を詠せん

よみ人しらす

名をとよめる世の山ハ秋更ハ色かハる山のかハるとて有也

ぬいしらす

まとゝ色付山の紅葉ハ色まさりけり　ことくりに　宮や蜂ん

高田山秋にゆきて　其のり

かの許かた待色のこけれはやかて高田の山といひけん

よみ人しらす

から衣高田の山のもみち葉ゝ物おもふ人の袖も成けり

高田山秋にゆきて　貫之

足曳の山にとりのる山おりもちせよすゝ姫は来けり

紀しらす

かの貫之高田の山をはしらうたとも読かぬにこ貫ハ高の所ん

つき高田の山のもちとゝも名の色をもみえにて　まかりけり

くゆ詠てたゝに名所にと西ゐるらと山のもと

ちともまつれはと詠せるよ

孝ゝ孫

いふ本にもえこう見えさう孫姫山の紅葉　中納言兼輔卿もえん

題しらす　　　　　　　　　　　　よみ人しらす

秋の野のからにしきにて山かきかへてに(?)もみちかへても

みなとこに秋はくとりんかけしこき南の山の紅葉ちるさと

わきてや我か身のみはしらぬ色そのゝ(?)なれの秋はみえけれ

　　　　　　　　　　　　　貫之

秋霧のたちかくせともりかれはのなりにてちりぬ風のまに

むらかれも(?)紅葉山の紅葉をたちてあけはたゝ見えてもちるらむ

かゝみ山をこゆとて　　うせい法師

鏡山やまかきくもりしくるれと紅葉あかくそ秋はみえける

これよりみものさいたまの時九月八日伊勢の(?)

こゝにはかはしせられはしらせたまへ人の許に

やそかへをとて　　伊勢

秋すきかならひの人に(?)ならひてや宿の菊をあかすみるらん

かへし　　　　　　　　　藤原のおきかた

幾とせかへて宿の菊の花のいろしもいくかへるらん

九月九日伊勢のかりよみける　　　伊勢

菊の上におきゐる露もひさしくはよをとせの光とそ見れ

題しらす　　　　　　　　　　　よみ人しらす

菊の花長月ことに咲くれはひさしき秋や知らん

あるとき長月はかりにきたりける人の菊のかれたるをみて
かつみんとおもふこゝろのしらぬまに
色かはりてさける菊のあとさへみれはあきの菊の花
をとこのせんせきしうまてこさりけれは
あはれとてゆきし人をこひわたる花もしもにおく露にこそよれ
月のかつらもみちのちりかはて
もみちはのちりくるみれは長月のありあけの月のかけそさやけし
読人しらす
いろいろにちくさの秋の山かせにちりかふ紅葉いくたひかみん
ちくさなるみとりの秋の山かけにつえをたてゝもとふ人そなき

もみちはをみる人ことにちりかへるをしむこゝろも人にまかせて
うちはへていふかひもなき秋の色にはるはるきぬる人そみかけん
貫之
よみ人しらす
山風の紅葉のまゝにちりしけはちりなはおしむ人もあるらん
秋のうみと浪にとりそへ秋の錦はかたみにもみれ
立よりて見る人ことの袖ぬれは秋の錦をたちそかさぬる
このはにそてをすりけるもみちはゝおもはぬ中やかはるなるらん
秋きてはちる紅葉はも女郎花宿にかりしく錦なりけり
足引の山の紅葉はちりにけり風のさそひし人もまちけん

紅葉ゝはちりしく秋の山邊こそたちて年を錦なれ
立田河のこゝろまさるひかなかり山のかけちかちとしもくし
貫之
立田河秋にしなれは山ちかみなかるゝ水もゝみちしにけり
よみ人しらず
紅葉ゝの流るゝ秋は河ことに錦あやなす人やくみけん
立田河秋はいかなるあせなれやあかりきるらのなかれ
文屋のあさやすと
浪わけて見るよしもかなわたつ海の底のみるめも紅葉ちるやと
藤原乃おきかせ

木葉ちるころは波こす秋なれは紅葉ゝ流さ染ひかり
よみ人しらず
とひ来ぬ秋みに山姫のぬさとる人の紅葉とそ見る
貫之
日暮の声もいまはなきこそ秋はつれなきくれのなかり
よみ人しらず
風のおとのかきりと秋やせめつらん吹くたひことに声のたえぬ
紅葉ゝになかるゝかりの浪にゐる月の影さへうつろひにけれ
あむ三月も傳るおとこのむさしのことりす傳
なれ七月くらにはつかしきる

右近　将監家縫女

契りこの秋のよな〳〵なれしは ひとりねの忘れまじきるる
判しらす　ここ人しらす

我こしわが心しら露のはら〳〵とまとひつゝ
あひ見て侍るる人の心くまもしらすもかに
衣かとこの[illegible]まさて[illegible]ぞありし人とやむも志
ゆくさきてのちよさてこそりそれん

手の作定縫者の女
秋ゆく[illegible]のさく白露のたてぬきかるるらん
かまにゆるあふさこの秋をそへ[illegible]けり

青侍香合のあり二番

ふることの秋しもまれ[illegible]かりし我と人の[illegible]
[illegible]と色まさりさいそとは女のりくにわかりし
源のこのみ

衣ふを染めぬる秋すてと秋[illegible]と作り出る[illegible]
判しらす　ここ人は

此月の折さこに[illegible]と[illegible]るさ[illegible]ふきるよみるとこの
松宮の内侍み為補佐者の[illegible]かくらうりし
[illegible]るふくはさりてのこつせそてあかいしに[illegible]
かりしあるる

又 残月下何とゝもなかにはしらすけゆの枝よりぬれは
秋やこゝろからかはされぬかゝらし何かあかり
のうきてふらはめれ　源のまさす
あか見人の余執とかけ獨りこゝろはまさらん
菊のもちかはりして人のいひゆめそれん
らしく　人しらす
いにしへにみとつくもいとやあめ人やかりけん
身のまゝりそめてるまゝにけふゆめそうつ
このまゝのりかけしより　伴よふさむ
とこ世て行きかしたなとすに菊の花とゝな

あそれのへしぬるか　赤染の大江衛門
枝もわらはかり秋の色にかそそむすくまかよきかり
かくし　こゝのわり
萬のうそらひの宮敷氏のまけはゆめん
延喜のみかぬ時あ武のここかしはりぬれん
よそすてそりぬる　貫之
秋の月もからたかけにあ菊のゆかかけに人のかくへはなにか
郎しらす　讀人不知
秋の池のそね鳥今をはかるともか風をえん
たとこのそれのへよゆくむよそこそしいかと

こまくさこゝろにまかせ[illegible]花は花にそいりて
かゝりしかは
らう人のかよひ路に菊の色をかゝやかせは[illegible]
身は不知
吹風のくもる空の秋の月のかけはこゝろん
紅葉かなもるりほとける木のもそ
紅葉そこもしちあかにこまりりを花の[illegible]てある
まよれはまるかなとこのりちとありしそく
待まれん
あかつきもはなよし秋もいろ色のかさりと見えそなか
れり

長月の花にこもりの日かりもちにこもれと花を
へとこそせて待られ　ちるかしとめ
宇治山の紅葉を見ては長月のうつろふ色をもて[illegible]すかな
九月に花にこもりみ　貫之
長月の在明の月はありなから秋は暮ぬるかな
松虫の花にけりの秋　躬恒
何方に夜はなりぬらむおほつかな明ぬかきりは秋と思はん

古今第七

後撰和歌集巻第八

冬歌

たいしらす　　読人しらす

初時雨ふるほともなく佐保山の梢あまねくうつろひにけり

神無月ふりみふらすみさためなき時雨そ冬のはしめなりける

冬重はさほの川に流るなるもみちはちりてうきぬすてうら

ちりかへる人のきのふに神無月いかてかさらに時雨なるらむ

秋はてゝ時雨ふりぬる我なれはちることの葉をなにかうらみん

今はとて我身時雨にふりぬれは言の葉さへにうつろひにけり

吹風は冬も見てこそしられけれ紅葉ちりぬる嵐なりける

神無月時雨とともにかみなびの森の木葉はふりにこそふれ
女みなにけりしける
雨のふれは折てぞきつる神無月時雨のいろをみせむとおもふ
といへるとて
増基法し
神無月時雨ふるらし身なからへてはあき山のいろかはりゆき
神な月くもりもあへずふるしぐれをちりかゝりけんとて
ゆふりこれとも作るあはれとおもひにけりまて
きそしる孫くながれゆけしける
藤原のたかきのかみたん
紅葉ちるゆふべ時雨とともにふりてけし

かへし
おもふえのちるを
紅葉ちる時雨と倶にふる雪をかへりてもやまぬ
読人しらず
神無月かぎりとや思ふもみぢ葉はやむ時なくぞよるさへぞふる
千早振神のいがきにもみぢ葉の時雨とともにちりけり
すまぬ家にまで来あくらむ流れきてひとり
かへしける
枇杷左大臣
今日みず落つる宿にかれにし木葉は錦とぞみる
かへし
伊勢
深山には時雨とうひて古里は紅葉ちるともまさりけり

詞 して
秋の夜の鴫のこけ玉章のさしそへ物かたりみれ　後人しけ
枕やの枕に涙りてさしかすらかれしれは
しさる　命もを露ハかりけり
此比月比女なすを蓄て候處まかりなりしも候
詞 して　さる命ハす
我身とかくて玉や平家の一門の公家主人のかまへめされ
君なんは日武者にいれられし　なる
人の手すてにかなて我身のけるしとにけをこそ有へし
名ハいかに

かゝる平家の一門も白玉とうるかる庭にて人の名つく
此比月比女もなれ若狭の山の雪もゆかりしけ
と羽の風もしらとかるる是かの山つさらすり雨らの
是つとの昔くかは身にいまいか初音とも長とすみ
殺らん源氏の里の滝　きいまえたいやもくさ人のなりき
子を振此月そなりもれ我身比女となれとも
平家の人のみさきかひてかるふるとうつ行なる
とのらし何しるる行をとまらいとう
との前　宮の名このりとうこのうろい
くたうとみ久れいうのかすうこと

よしの山雪ふかき道は絶えて待わびける人をとかくかへす
女
雪の跡をふみわけてつゝ山ずみ
きみ迎ても待雪はむかしの我にかはりてなるらん
なる　かへし
の林とけの郷下
色かはる色もかはらぬ白雪はきえてもはてぬ名にこそありけれ
又
法のゝ山ずみ
思ふこと雪ふかみのこる身にこそかくもうとましくこそあれ
返し
の林とけの郷下
年ふれば志るへて物かたりすゝ後の人のよをも雪のふるみゆはつけけり

危いしは　らうたき人をいかす
年ふりていろもかはらぬ松が枝よかゝる雪にもなれしことし
霜の置く松の枝を雪もろ白雪のつもれる跡は花とこそ見えけれ
君が代にしほりし松を吉野山にかはらずまつ君が代す
らむさし林とけてとけは驚かすひをあさゆふ逢へらん
雪のすこしふる日女のもとに遣はしける
春風のつけけりと
かつきえて雪にふりつもり雪は地に人の心に残れる
とふ人のかよひのなきか家のまへへこら
雨のふる夜代々て
読人しらず

白雪のふりてつもれるといはさらめとたかねはよそにいへん

題不知

音にはゆきのなかりせはそのものはさはりもあらしとおもふかな

新玉の年をまちてけふよりは雪の下なる白山

ゆきのふかきかくれなきはなにの雪のおもかけにみえし人

白雪のかゝるやまとみえて谷ははるなる雪のふる里

谷の雪は花とそみえけるかすみつゝ山のはるとはしらぬ

たまもるかけのそらにみえしかすみもさすかなる

けさみれはまたあけぬよの白雪の

吉川のはるもあらすゝかたにゆかは君かまたくへき

さかえて雪の下にはかくれとも梅のえたをりてみん

冬ころもはなのゆかりの雪ならは花とそはやくへたつる人

山のはのかけにはいまたきえやらぬ雪の下なる花やいかにと

松のえにかゝれる雪のはなとみえて花のこゝろはしらぬかな

淡雪はきえてもまた花そさく梢よりこそ

淡雪は身のうき年のわかれとも花にはなれてしぬへき

淡雪は枝にかくれてみえしかと花のこゝろはしらぬかな

にほひは月にかはれるむかしの庭の雪にまかふ

梅のえは淡雪にけるよはにたに花とそみえん

作りかたくさくものかはかたきの年のひとたひまたまちかねしか

年ふりし海は雪なれる時はむかしの友に親しきをむかふする
年暮まて明日に如雪はむかしになれる人ちりゆき
まちかく海白雪ハいとゝ山里よりも花のさかりなりける
冬の海より東へ行その浦まて下ハかくらん人のこゝろを
むかしよりの三重ハ白雪にて月の光なかれけるなりけり
この月かゝる年の暮より海ちる風雪はなほさりけるに
世ハこゝの夜とひてハ千代かへしにさそひて雪汲ぬ
みしものゝ別前をしるとてハむかしの心
みるとえ行つゝすしてうら年のこゝろすなれに
そりの日はいれはしれる　あらし人の命は

抑そこと月日とともに雪のうちにこともしらす寒さなく
てあそふ身く

五十身へ

後撰和歌集巻第九

恋歌一

かたらひしてあひしりて侍ける人のほとなくことは
またあひつゝ侍けれは

源の宗于朝臣

東路のさやの中山なか〳〵にあひ見てこそ恋しかりける

思さりける人の許よりし侍けると人せんさ
いつく侍けれはかへりて侍りける

貫之

嬉とするにひさしく別まし(い)ふもさてはこれをかりけれ

源のかねきらかかよひ侍けるとのちはかよはすなりにけれは
里侍よりかれかこすりの人せむあるさくらかれさと
いれにこそ流りしけゝすなか
雨とかやあ人のあとに人を見るまに雨しける人すゝきの葉
あたしけるて侍ける人のもとにかへりてきゝんとそ
流りしけゝ　りとうしかけこ
名もとまらぬ名あとに侍らしてからぬ名を侍らす雨そめり

返し

藤原のりつね

名にしあらはかゝる思ひの君か名やたゝしいたつらん
なかなかあひ見て侍ける人すゝかれとに流りか

りける
うらかれて言の葉もなき冬の夜の袖のみさえてねられざりけり　よみ人しらず
かへし
秋の野に笹わけし朝の袖よりもあはでこし夜ぞひちまさりける
女につかはしける
今はとてわかるるときはあまの川わたらぬさきに袖ぞひちぬる
ゆめぢにはあしもやすめずかよへども
うつつにひとめ見しごとはあらず
まことにやいとふ心のあるならんとふにつけてもつらくみゆらん
伊勢

わがいのちすぎゆくほどもしらぬまに人のこころのかはりけるかな
返し　三條のおほいまうちぎみ
あふことのつきなき身をもしらずしてうらみける人をうらみつるかな　よみ人不知
女のもとにつかはしける
消えぬべき身をもいかにかしのぶべき思ひのこるはなみだなりけり
かへし
さきにほふ花をもみずてすぎにしはおもふ心のありけるゆゑか
紀しけゆき

我こゝろあひ思ふ人のすさむ時は物思ひもひるかたなり
浮雲のしも我袖にいかにてこの思ひ波よあかす神る
女のもとにつかはしける
人こひむとあまたに下ひものとくるあまたまた人は
結ひ髪し我下ひものいまはとけなは人のとひあはなくに
女すむ人のもとにつかはしける
かはせは物うかるなりあすか川きのふの淵ぞ我身なりける
かへし
淵瀬ともいさや白波たちかへり我身ひとつのよるかたもなし
読人不知

むかしより思ひける身へさへかはりなば流るゝ涙いかゞしける
ある所にあるをとこといひける人のもとにつかはしける
貫之
塩ならぬこともなけれどやまとうたのおもひあまりて身のうさをまたなるをもあはすれ
かへしても人すむ物にながれやしけむ
うすなりけむ人に
寂之
宗子内
から衣たちしものかはさだめなきわれとやおもふ人のこゝろを
おひまねかしる人のこゝろもさしらせうすこゝろあり
やまのはに流れゆくらしせなる
陽成院
乳母
はかなきこと

影をみんとすゐかふる山の井あさく参りまてもかへ波ゆかし

かへし　　平定文

浅てふすとゆしと山の井はわりしにこりよ影見えなむ

題不知　　読人不知

武蔵の生田の川に立出る波よ我もとらぬねすむ

かへし

立かへりわまてしはし乾る塩の生田のうらみさうしこそこれ

女のもとに

あかすいひしと雲井の大井に立居ての世をしはしきかり

返し

我か身をなくしてもすへ人をみるよりも雲ゐのよそに見てもいかなる

人のもとに

このころはたのむ事ても空のた月のいつかこひ人とすへし

題不知

大空をなすあまくもはさいなの海路人こそ知れ

身はたゝかひのまよひの大井をさへ空のうちのそらにもあるとも

見知をそれもしらぬとも我立居のほとてこそはなし

女せんひかりに流るゝしゝる

枯ゐるものゝはなかりて時すきてけり身をすてむ

返し

あるにもあらぬ人のかゝる思ひのみまさるを
うらみかれにけるとてかの女の許なる人の
ことはなくしてこゝろがれなれはいひつかはしける
思ひきや月日はたゝにすきゆきて松山の波越えなむ
かへし
月日ゆくかたをしらねは待人なりける我身なりけり
女は年をへて思ひしはかなきことのかなしと思ひつゝ
ある女ははかなしとのみいひはてゝ又こゝろせよとたのみ
なるとものかとをまちて侍りけれは
思ひつゝ侍りける

本のまうけるの曹司にかよひけるを人のあまた
はさしあはせしえ侍らす侍ける女すみつきけれ
うかりける
贈太政大臣 本院左大臣時平
なかれてもあふ時はありけるの(を)まちわたるかな
かへし
伊勢
人まつる涙はまさるなかるゝとたのみし人の我身なるべし
かくこの世にてかくしにかよひなむとせしをはなれて
ても頼めしこともなかりければ女まかりにしこのをと
しける君をかくはなれてよめる
源のたのむ(?)女

陸奥にいくりえん時に我宿にくゝすゝみのきてし
かへし　　敦忠の兄に　一本或人に
墨こしは写しとゝめん梅さへや衣の袖に　よき(?)に
えることかへ(?)て女をこそのなくそ流れ(?)しぬる
　　まさ道のつゝ式
粉ふ源信隠のかくしをする人を書雅とき流さる
いと思ける女ありけるに人のつゝ
て文おひて侍けれは　是忠のみこ　一本或人に
あふことのこゝ忘れし名まかなのとけりあめよりそ人
女のりとよりに忘草よは知るかは流るへとこせ

て侍けれは
　　読人しらす
こそはいつとしかなすか(?)はすける草の花をや何とある
かへし　　無名のことにふ人
うつる人我は思ひてわき人のまたはすゝる花をわれもよけ(?)
平定文かもとよりすみの物(?)人なん来かると
いひをとりて侍りけれは　こさ
うつろふを見るめかるてふ浪の男はうつ離波の方へしとめ
かへし　　定文
唐衣かつさへ人の流れの国の(?)記えぬ人を我にやはあは
流くるかたにまかる人ならは流れかりしぬる

伊勢
いそのかみふるとしへにし人はこゝろをかけけるにかたみてこそすらん
知不知　こゝ人しれ
見もせぬも風雅にかくしますな後人のためとりかゝりかすらし哉
志のひたる人に逢はしけりときかれ
いたう山吉の下のおもひ思人のこゝろおもはれてをかしき
人をあひ思ひてのちもさしらせうすことも
けりかきれん
これまては古今のことし家にかゝれしあるかのまゝはた
あいし次

いやしき人は常におもへるかたはしにものをおもふなり
身は色ことの旅とすゝりとこそ思ふとこそいふなる
後吉の岸のたつをものゝいはかみかるからにやはらきなり
あはれなりけはいはりぬ地よりて名はいつはりのことを残りけり
言ふことを道にしたかひてあはれに物のいひをかしき
世中は思ひつゝ色に心あり色をしるきいあはれにて有様のみにて女のなり
思ひを色に深く旅すする事なる富士の様をなれはいは
春のかの残る我なかりきたまもの見るを思ひし心をよせり
花とこのそしそて女の色とみ道なりて紅の衣
のちにかへりてたはりしかる

しら露あふ所のあしの文ハ斎宮に帰らるゝ物ニハ

かへし

秋はなる萩こそをけ露の葉もさもこそ人の恋ふるなれ

たゞかりそめのかことにハ

紀の国のかみの人は斎宮の名の高かりけるをきゝて

かへし

うらやまし我が身ハいつか橋の上にそよ神すへにてなし

橋の人ゆかしき女のもとにつかハしける

かりそめの人の恋しかりける

おなじ人かりける人すみ時に人につかはさる人ゆかりしいふへく

かへし

大荒木の森の下草なれや人のうけひかぬひとひとりかり

かくこのことを女しるとこそ我の家に帰りか

へるとて

別といふ物のうき物としりせばこそ名残とならし物をしかは

よみ人しらず

男の女のもとにすみけるほどに斎宮にいます

身となりてありけるを御かへりに人のいひける物と

雲井にて人を思ふとてあまたあはれの身ならずなりなむ

人の流りしける

源の至との御七夜(?)なむ石大弁

あさちふの小野の篠原忍ふともとはまりてなとか人の恋しき
加様とり
白尾まねれの玉の緒すゑ恋とて乃画さしける
心えんしうきせうぬ世の中の人あらとひさしれたん
らとく人ある
住吉の海よる人もかはまる身をみる身の我を画さらん
人めはれけらし　かとる
色よねし恋せても岩のまたしき涙よちめの秋のこ恋れえ
かく恋る物と思はせいらんいかきそ鶴いきさ世の房なきまると
あひとミす鏡とうらすわりし時やよことこれ身をなやうしの

恋のことうらの夷物なれるかひる出る(さ)もつらいかる恋しき
女のわとこにはれけらしまる
またのとにうつき心をせいまそよ家をことしとせん
水よいのるひるり涙川うきても人とらはるよ見るる
かんし
いのちある(と)き人やららそ花のまりそよ新の人を孫い
たいなよはれけらしまる
色ふくさめし秋のいとくし涙よ人とこさ画さる家
右大臣
知不知
須人不知
君る時いまそとそれくこゑ時いまとはりのよ恋しきやなう

ねところのさまとてこもりゐたりけれは
山里の松のしたもえさしけりきたのかたの人を迎へしけり
ありとて女のもとにいひつかはしける
ゆかすとも世の中にある山城の岩かけ道はくもかゝりける
女にかはりてよめる
命こそしらぬ人の末をたのみて君を恋しなむ身ともなりなむ
かへし
たのめつゝかすしらぬまにたのみこし人をこそしらぬとも君
女にかはりてよめる
人しれすおもふ心はありしかとことのはにたにかけぬ比かな

男ありけりと聞てよめる　中務
はすてたにしらぬなかたにしきならはことゝいふへきなのなからんや
源のさね明
かへし
わひぬらはいとゝくるしき我身にてかくてやみなむはつゝきにけり
雨のすみけるにおくれける女の人に花おくられけれは
しのふ人に　よめる
春すきてあとにのこれる花よりも松のみとりの色をみえなむ
かへし
住よしの岸の松は世に年ふとも松のみとりの色をみるや
おとこにわすれられけりしよめる

うちはつゝみよのかへしゝ旅すかみ蔵の見なりかかりけり
女かんしうすつかはしける
思ひかくるしきこそ旅も見る地と住吉の松
かとこにはつかはしける
かへしてあひみてしかゝ人家のかゝきいかみ家みな
友なり

巻第九

後撰和歌集巻第十
恋哥二
女のもとにつかはしける　在原元方
人を見て思ふ思ふもいはつゝ地成つゝかゝるうけるみかりける
みなのきそ旅
我のことなりへこゝろしいみして物すしゝみ人をとし女
尤のことのり
我かいかにひとつゝ見ぬ人を思ふかな恋しつゝらん
また年ころかりける女よつかはしける

こゝはなにはこそかの花落下の心よしとはなしけるや
源のまたく
人をいひしとて　の孫なる右大臣こそ
是民の上下たくくらゐするの君そのうまれと申す人
たゝふさの朝臣
かくまさなる思の孫なる我身かいそのかれとおもふや申まし
女さんさうしにかくして立よりてものつくりとひ
てのち　菅家の万けう文　帥に
あまたのまうとらなし給ふ捺するまことに流され我ともかな
梅も流の世とよかりけりませさりける女のりと

にほひしける　人しれす
あやしきいふ人思心かいかまてに朽はひやむへき
いかなるとてもせさりけれは流されしける
東院の右京
こもかくいふ人の万葉の君をぬれいふと京のかゝりそこなれ
部卿知　たゝ花のこしける
院のうちなる哀れなる源の家かりまかりてとゝめ世をはなれ
かへし　たゝふ
渕にくいへとも申す源川かりやまに金沢のあゆみ
文　こしける

やらんかた浅かりける世を渡川とも思ひ定めてわれなれやと
ことさらにあはて過しそのひとへ重ねて
女の心にあらて人にさへ捨てられてあかりぬとそ恋しけれ
とのひ出よりまへ流れてはつりしかる
藤原の朝臣
かりそめの人の心と知なからこれもやとけはまたのとなるらん
あひしりて侍る女をことをしりて侍
わすれいとかうかんつかはしたると人の心もかは
もとれん
藤原のあきたゝの朝臣
世の中は絶えて久しきまことをはまことさらにそ我はまたさて侍り
ふるからんしなる女のもとに人のあらはれてはへり
けしかる
かくはかりなかきまよひにもかつ人をけふもあはたのことなりけん
わひしきにこそりかなはれはかりしかる
平のさたふん
小町か孫
我か乃契りかかん庵てうきの露も白露そ
こひしきを
枇杷左大臣
世と海のあはと消ゆる身はかなきものをわかれてそなけきあはれなる
かへし
伊勢
まちえたる身のまゝにあはせねは我か身のうきに沈むらむ

人まかりしに流されける源のみつとしあそん
東宮の姫の事によりなきなのことゝより流され中納言のまさ
人に流されける　院の御せかの御時
うしなへる事ありとてまつり事に　大臣の流されきこえてまうす
女に流されける　とかくに人しれ
よしなきことひとつをひかれてうへの御みことのかた
ありすれはとて流されける尼のかたにかへられて
わかことに流されける
ありときあまりしとのこいろ風にふかれしきにいかゝあはれ
女のゆへに流されける

きよの関をこえて備前の山をこえて松の木のもとにて我身にふれて
とのまへかりしひとをおもへやかりと思ふ女のか
つりすへ流されける　うみたけのかたに
難波と切り流し若君の流され一人を定て我や屋にて
上総の所に御かみける道にも庵にまみさ
こえにかりて京人流されける流れてふかつこ
のかにけるに後見待ける
とゝと　人不知
我とやたまこえんとかのことをそうてもたいかね
あひまゐりて折ける人のりそうり　ことそしく

こなしてゆりよりまたいさありやとたのみ
まて侍りけれは
ゆくとも逢んとそちよちそれ人をまちあると聞かれさるに
人のもとにつかはし侍りけるあさつく給
きかれん色のよりきを流しと侍りける
在原の業平の朝臣
業平よそ孫て世を色と詠よたる人もなる歌を様
をとこえん会の女といふそちらいひと世侍りける
女いとまりのしといふ世られん
かとくらしゆき人に

よりのしとかそへられせとろうすをもへぬとおもへ
女せんかとより女さしのかへはんえたつね
といそうされた
在原のおきかせ
我思を恋人とおひて国衆をまつのかへ人ら
いむかりしまる女のりくちうちなるりよふ
ようそあひせまてとそうあれん
元の黒主
入拾遺
色すへ流るもとも深てよしさくやうえやはしとせまる
ちとのようひまる女のりとへふを流りしう
きるいわらわしとそしせりともせさらりてれん

又流されける　　　都武のあさはなの卿

是光乃庵まひすとも〳〵はなはれともおもひくらし哉地と

おほ流の孫よ地のさかひ流れしけるとをさに

同しまさるなれん流れりしける

　　貞元
さたかしとのみこ
　　閑院三のみこ

おもふらん我身のかく為者の妻と人よかよふらん

かへし　　おほ流の孫

今は我かたの若のかしきれ者もしれとも知とはいはん

おもふとせきりける女の方代か尾にして

　　よみ人不知

えそ

いとゞ見風の常に濱よりゆきいて立よりの間のまかれもせれ

松山所にて見えしおりしていさぬる女よ

月と見て流る雨にあらはさんそ地の松をおもうとめなり

心さしいかりける女よ流されける

　　中納言公教
　　かもん人よりの節

いまはまた流の居の方への月を関よりつあまりしと雅し

　　貫之

任のえしおもふかいの浜に松くも心の花にたとそる姉

笠置よ流されける　　読人不知

又ある年の笠置とも名はいしよかしかなり

ゆくりなくそこに流ありしよりかれん

中将更衣　大和守のむすめ

はかなくもおもひし地を遠ざかることをたえて忘るゝことはなし

御返し　延喜御製

うれしきを何にか色をなげくとのあはれにおもへばそらかぞうけん

読人不知　藤原のもとかた

流てはゆくものなりし涙川もれ出てこそやがてさりけれ

在原のしげはる

我思ふ人の物しとつゐに下ばやの涙のなかにしみて流るゝ

流れゆきて

涙川出る方をしらねばいかにして瀬にこそかゝれまし

坂上これのり

たちかへりあひ見ることはかたければ何をたのみて住むべかりけん

こしかたもしらぬなからひ何をもて人に流れしける

貫之

玉の緒のたえてみじかき命もて年月ながき恋もするかな

読人不知　平のさだふん

我のみやおもひて流れんことはりとなげきおこたらぬしのびねのこと

かへし

ゆのかみと

思ひの露わけてもいかでかはたえしそらにさはるべき

心させる女の家のほとりに侍りていひいれ侍ける

貫之

悦こら我身は宿をはなれくは窓の植稲の葉にそかくれん

題不知

在原のもとかた

見るめかる渚やいつこあふこなみたちよるかたもしらぬ我身は

またあはす侍ける女のもとにつかはしける

小野宮のおとゝのむすめのもとにつかはしける

なかしこなほ流るらし

藤原のたゝ行かと（滋幹）

まさきのみゆふしをかけてこふとも人はまたしらせし

題不知

よみ人しらす

高砂の嶺の白雲かゝりける人の心とたのみけるかな

長明のみこのもとにまかりて侍るに

流れかれしける

延喜御製

よそにのみ川はたるまて人の身をさへ人にまかれなれ

題不知

恋しさの

つらさにも君見えぬ時は漢なる夢にもまさる夢のなきかな

ゆり折にふれて身をつくしける

藤原のかねすけの朝臣

いしける

さるかたの庭のほとりに紅葉のちりしくを見てよめる

女のもとにいれりける

梅のさかりしの御下

流しよとせうとて渡りけるを見て人をみるのむしろ流れ

かへし　ときく人す

流てこそあたなの中に渡りしか京やなかのあそかれすに

人をとりひらうひて流りしける

平のさだふむ

何すとて嵯峨のむしろ千手振紀と云ふ男すみて我か男なりけり

かへし　松か浦に孫

千手振紀よみけるを見て海へいつ年の思ひは

女のもとにありけるを見て返し給

なきなにといひまた給ける　流れそ

恨て身を流しわれ難きを見て返りけりとも命へ

あひたりて侍ける人を見まうしとてすりして海

りあり給はれは門より出て流りしける

みつの身に孫

住吉の松の並てるたよりてかへりけりや孫なりけん

たとこのかよひ侍けりて命ひるなとに

思きれ女ありけるにて読人しれ

むかしのしれる花の若きとてたよ忘孫

かへし

真白なる花の折れる人の若をいてつとこそしれ

題不知

ことまてもおもひの恋をもちいし身をいのちのおしからん
人のそしりはよもあらん　右近
さんとなりし人はおほとこいへり この歌いかにもいかによみたりなん
とかくそのかへしの尼をひとこゝろにおもひけれは
かはとこゝろの名にあるところゝしと頼みして
うくにいかにかうして後にはあはぬこゝろを
なしといひあはれて　源のこれたゝか歌に
まことに西の大臣の頼ましかはらむ夜人かしかわかれ
こと女のおもひかれけるとかいひおくりけるなりけり

さりともと頼むこゝろはけにいちのなかにもみつゝそれたれ
りこゝろ　読人しらす
西宮は根さしつゝもかくしてしあきらかにはみすかん
剣さしらうかゝさりぬる女はほかうしぬる
源のさねかとう
まことあひみむ後とも頼みかけりよかさん物とは
部さうす　菅原のおほうた
とかゝ源の孫にてまつるまさりし源宗于はこゝらにて菅
ちかうこのゝすけいれたる後に歌のこの歌なりける人の
おほくもの名のし

源ゆきよ
恋しさは秋ぬよりまさむなしさに恋しくや我目も見えねば
とし毎もむかふより待ちける女なり
源のすゝむ
冬くとも恋ざらめや松の上の岸よ年経る松の前を
知不知
菅原の朝たゞ
あふことのなきを憂世の峯の麓の桜花さき出ずれば
かはすがぬよりもある人ならはしも昔の桜よ
流れそつゝりける
よみ人しらず
何ばかり行くとも山の風木も高くなりにきぞこれ

女のもとにかゝりて枝に流れける
源のちかこうの朝たゞ
知る人もなき恋をする君の枝の山のありかの月見てし
う秋とけの都にはあひたもしまぞつ秋りしと思ふ
さりける物よ
歩きたつ女
そはれ花を見けの常も山の見もりと思けるならまつもと
たえまかりける所にたく人の帰るとて
菅原の有文の朝臣
こゝ何も人秋を出つ先本は君をみて先く年秋かうん
大江の千古
知不知

ある男たえてひさしくありてのちに人のもとにいひおこせたりけれは
思ひかはしける女のもとよりかへりことかく
とりて侍りけるをいかてかへさむとおもひけるに
　たえてしのひける人に
あふことは玉のをはかりおもほえてつらき
ひとりのみねの芦の根のうきねをわれもおもひしらなむ
思ひてあひしりける人に
　藤原のたゝふさ
ふりそめのあさからはかりけりふかき色は思の下にこかれて

寛平の御ときさせたまうてのちは
帳のめくりのとに人々さふらひけるに
みかせられけるにかつへ給ひてむさと
きけは　六條の御息所
立よりて新しきむすめ(?)てみれはうけとらせ給はぬ人もなし
をとこありけりにけれはしける
　大左
神無月立まちかねて時雨こそ山のもみちもいまはちるらし
月をみれはふかくおもひいでつゝ人の
　よみ人しらす

むかしの滝をまかりて起おつ月をとゝしよりなよめる

なとこのりに流れりし よめる
かの綿わしまで我は豆をたくいはせてとゝしは流まるとき
よしめて人目流るし よめる
人侍りし会篇の中よりむ音流れの山はうへきを
ちらぬ人と見てそ流りける
貫之
あまりにおもひのあひの布さらすなる人の流るなりけり
人の家より ありくにあつまる車とこそ流れにて
かわし侍まとれへ 多くと思ひきれへ あたる

家のはつしと関て流りけり よめる
人流に公あるへくけりしあるこうあまたに恵まそ首は
人とふるけて身もまやはりめん色ゝ
いかすして思ふかれ 世をもあるすこ関て
このすひのまくる女のわとりうまかくさらむ
しいとり思て侍まれん
いにしへの事をはかの浪を音波のひろう滝 とき
心のうちそ侍まれとも思流れん布もつ流まるな
躬恒
むかしのみて身流れりし よめる
物のまことに身しふこゝろまなる関て恋の関なりけん

おとこの女によみてつかはしける歌とてよみて
なにはゝとおもひけるをんなにつかはしける
みすてゝ右のおほいまうちきみはかり侍りける中に有はす
右の大臣のうへもとめてしもとめて東宮のみこに
あひおもひて侍りけるかへりことに
兼輔のあそんの家にて年月をへてまうてきける女に
おとこのかへりことにまうてきたりて
人のいふらくたえて十二年のゝちにまうてきたり
しのひてまかりてのちにあひてかへりけるとて
いまはとてかれなんとおもふ人にいひつかはしける

かへしはつかはしけるまたにもせきもりもこそあれ
かくてきみにつけてたのもしけれは月のさくなりやとおもふらん
かへし
是貞のみこの家の歌合にかゝりけるにたえてまかりけれ
人をとふもの心はかりしける　平定文
次のなかにけれともしのひてすきてのちにまかりけれ
かへし　藤原のあつたゝ
はかなき女にいはせけるなかのいとしき人のほとりにまかりける
人のかたらひてそのとりわけてなかりけるに
まかりてたつにむかひてかへしける

源のもろあきらの朝臣　庶明　権中納言

風のまへのことなす家とおもふ心をたかへ千歳よりもゐる
かくてをこゝろにて給はれとこの花のよはひ人多かる花ん
いとまなくして又せむ朝臣このこゝろの花をはなれかし
てをこゝろにて給はせる
をとこのかつかねとは言人をもをはなれぬともつこの花
かくし　人不知

望むともいかにたのまん君まさしこの花いとをれのみ
色のしらぬ

巻第十

杉伴平　在判

筆者以定家之筆不違一字證本須

于時大永三年癸未於武陵野居書寫

卜（こう）雲令及愚老納矣

及愚

国立公文書館
National Archives of Japan